

唐長安の東明観について

土屋昌明

はじめに

注1…拙稿「長安の太清観の道士とその道教—史崇玄と張万福を中心に」『専修大学人文科学年報』、第43号、109～136頁、2013年3月。この論文で東明観についても略述した。「道教の新羅東傳と長安の道観—「皇甫奉諫墓誌」を中心に」日本道教学会『東方宗教』第122号、1～33頁、2013年11月。この論文では玄真観について論じた。

注2…『長安志』卷10「次南普寧坊。南街西出通開遠門。坊西街有漢太學餘趾。其地本長安故城南安門之外。次東漢辟雍。次東漢明堂。二所並磨滅、無復餘跡。東南隅、東明観。顯慶元年、孝敬升儲所立。街東之北靈化寺。隋開皇五年、沙門善吉所立。北冢崇五丈、不詳姓名。西南隅、太尉英國公李勣宅。北門之西、司農卿韋機宅。西北隅、祆祠」。辛德勇・郎潔点校『長安志・長安志図』陝西出版传媒集團・三秦出版社、2013年、340頁。

注3…『唐兩京城坊考』「顯慶元年、孝敬升儲後所立」。李健超『增訂唐兩京城坊考』三秦出版社、2006年、244頁。

唐の長安城に存在した道観およびそこに所属した道士たちの具体的な様相、それら相互の関係、地方とくに洞天に存在した道観およびそこに所属した道士との関係、その道教文化的な役割といった諸問題について、個別の道観に関わる史料を収集して検討を加える必要がある¹。本稿では、そのうち東明観について論述する。

東明観の由来

『長安志』²および『唐兩京城坊考』³では、東明観の所在を普寧坊東南隅とし、高宗と則天武後のあいだの子である李弘が顯慶元年（656）に太子とされたのに合わせて建てられたとする（死後に孝敬皇帝とされる）。『唐会要』は普寧坊の東南隅のことはいわないが、建立については同様である⁴。

この道観について Barrett は、長安城の西側にある西華観と対照させて建てられ、両者で神仙世界における西華殿と東明殿を象徴していると解釈している⁵。これを承けて江鈺林は、東明観が顯慶元年に新たに建てられたとき、西華観の位置と長安城の横軸線上で対照となるよう配置され、陶弘景の『洞玄靈宝真靈位業図』にもとづいて、西華と東明は、それぞれ元始天尊の左位の西華高上虚皇道君と東明高上虚皇道君を象徴しているとする⁶。

しかし、西華高上虚皇道君と東明高上虚皇道君が元始天尊を軸にそれぞれ左位と右位にあるなら対照的に配置する根拠になるが、『洞玄靈宝真靈位業図』では両者とも元始天尊の左位にあり、長安城の中心軸について対照に配置されているのと合致しない。神仙世界の用語が道観名に使われていることは確かだが、東明観より西華観が先に建設されているので、当初から両者を対照的に考えていたとは考えにくい。Barrett は、東明観は西明寺とのかねあいも考慮すべきであると指摘している。

Barrett らが使っていない史料として、『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』卷10がある。それによれば、顯慶元年に延康坊に仏寺と道観を建てるはずだったが、玄奘が用地を調査して足りないことを奏上し、結局、仏寺を優先して、道観はあらためて普寧坊に建てた、という。この普寧坊の道観とは東明観にほかならない。

顯慶三年正月、駕して東都より西京に還れば、法師（玄奘）もまた随って還る。秋七月に再び勅有りて、法師は徙って西明寺に居る。寺は（顯慶）元年秋八月戊子十九日に造る。先に勅有りて曰く「延康坊の漢王の故宅を以て、皇太子（李弘）の為に分けて觀と寺と各おの一を造らん」と。法師に命じて其の処を案行せしむ。還って奏するに「地窄く兩所を容れず」と。是に於いて総べて用て寺を営む。其の觀は改めて普寧坊に就く。仍って先に寺を造る。其の年（顯慶三年）夏六月に營造の功は畢れり⁷。

これによれば、東明觀はもともと西明寺とペアで同じ延康坊に建てる計画だったのである。したがって東明觀という名称は、西華觀との対照ではなく、西明寺との対照で考えられたものというべきである。つまり道教は東の明智、仏教は西の明智という両立を意味するのだろう。その建立の勅命は西明寺と同じ顯慶元年に下ったのだが、別の坊に移ったのだから、着工は少し後になったと考えられる。

『唐兩京城坊考』によれば、東明觀は殿堂が広くて廊下が長く、廊下には図画彫刻が施され、その規模と出来は比肩できる道觀がないほどだった。その「規度は西明の制に倣う」、つまり西明寺に準じて設計されたという⁸。したがって、西明寺の建築は東明觀の建築を考える参考になる。

西明寺は延康坊の西南部にあった。その建築については、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻10に次のようにある。

其の寺（西明寺）の面は三百五十歩、周囲は数里。左右には通衢あり、腹背には廡落あり。青槐其の外に列し、淶水其の間に亘りて、臺臺耽耽たり。都邑の仁祠には、此を最と為すなり。而も廊殿樓台、飛驚して漢に接し（天にとどかんばかりに高い）、金鋪藻棟、眩目して霞に暉く（一面にかがやかしい）。凡そ十院有り、屋は四千余間。莊嚴の盛んなること、梁の同泰（梁代を代表する同泰寺）、魏の永寧（北魏洛陽の永寧寺）と雖ども、及ぶ能わざる所なり⁹。

中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊の1990年の発掘によれば、延康坊は東西1020メートル、南北520メートルあり、西明寺は東西が約500メートル、南北が約250メートルで、当該坊の4分の1の面積に当たる、約12.5万平方メートルを占有しており、『大唐大慈恩寺三藏法師伝』の記述にほぼ一致するという¹⁰。東明觀がこれと同様な規模を持ち、同数の建築物を擁していたと断定はできないが、これに「倣う」というからには、ある程度は共通していたのであろう¹¹。以上のことから東明觀は、高宗の勅命で建立された、豪華

注4…『唐会要』巻50「普寧坊。顯慶元年、孝敬升儲後所立」。牛繼清校証『唐会要校証』陝西出版傳媒集團・三秦出版社、2012年、741頁。

注5…T. H. Barrett, *Taoism under the T'ang*, Wellsweep Press, 1996, pp.30

注6…江鈺林「唐長安西華觀考——兼論唐朝前期長安道教宗趣变化与皇室之連繫」『弘道』2014年第3期、總第60期、53～62頁。

注7…『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻10「顯慶三年正月、駕自東都還西京。法師亦隨還。秋七月再有勅。法師徙居西明寺。寺以元年秋八月戊子十九日造。先有勅曰：以延康坊漢王故宅，為皇太子分造觀寺各一。命法師案行其處。還奏地窄不容兩所。於是總用營寺。其觀改就普寧坊。仍先造寺。其年夏六月營造功畢。」『大正新修大藏經』第50卷、2053、275頁。

注8…『兩京城坊考』「規度仿西明之制，長廊廣殿，圖畫雕刻，道家館舍，無以爲比」。李健超『增訂兩京城坊考』244頁。

注9…『大唐大慈恩寺三藏法師伝』巻10「其寺面三百五十歩。周圍數里。左右通衢腹背廡落。青槐列其外。淶水亘其間。臺臺耽耽。都邑仁祠。此為最也。而廊殿樓臺飛驚接漢。金鋪藻棟

眩日暉霞。凡有十院屋四千餘間。莊嚴之盛。雖梁之同泰。魏之永寧。所不能及也」。同前。

注 10…李健超 2006 年前掲書による。

注 11…よく知られているように、西明寺の設計は入唐した道慈が密かに写し取り、養老二年（718 年）に帰朝して将来され、奈良の大安寺の伽藍設計に参照されたという。この説は、古いところでは「大安寺縁起」（寛平 7 年、895 年）にみえる。もしこれが事実だとすれば、大安寺の設計から東明観の設計も類推できることになるが、その信憑性は疑わしい。堀池春峰「入唐留学僧と長安・西明寺」『日本宗教史論集』笠原一男博士還暦記念会編、吉川弘文館、1976 年、95～130 頁。

注 12…『長安志』「顯慶元年高宗為孝敬太子病癒所立」。同前。

注 13…『集古今仏道論衡』巻丁「顯慶二年六月……至十三日清旦、帝御安福門上。郡公僚佐備列于下。内出繡像長旛、高廣驚於視聽……尋即下勅。追僧道士各七人入上幸百福殿。内官引僧在東、道士在西。俱時上殿。帝曰「佛道二教同歸一善。然則梵境虛寂為於無為。玄門深奧德於不德。師等栖誠碧落、學照古今。志契寶坊、業光空有。可共談名理以相啓沃」。慧立奉對……時清都觀道士張惠元奏云「周之

絢爛で巨大な權威的道観だったといえる。

両者の名称は東西対称となっているが、東明観の移動後の所在地点は、西明寺と長安城の中心軸で東西対称にはなっていない。西明寺は、『長安志』によれば、顯慶元年に高宗が太子たる李弘の病氣平癒を祈願して建立した寺院である^{*12}。東明観も本来、そのときに建設されるはずだったのだから、やはり太子李弘の病氣平癒を祈願する狙いがこめられていたと考えられる。その竣工の時期について、前掲の『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻 10 によれば、西明寺は顯慶 3 年 6 月に竣工したとあるから、東明観も同じころであろう。他の参考としては、『集古今仏道論衡』巻丁に次のようにある。

顯慶二年（マ）六月……十三日清旦に至り、帝は安福門の上に御す。郡公僚佐は備さに下に列す。内より繡像と長旛を出し、高さ広さは視聴のものに驚かる……尋いで即ち勅を下す。追って僧と道士各おの七人をば入らしめて上は百福殿に幸す。内官は引いて僧は東に在り、道士は西に在り。時を俱にして殿に上る。帝曰はく「仏道二教は同に一善に帰す……共に名理を談じて以て相い啓沃すべし（相互に忌憚ない意見を述べよ）」。慧立は奉って對う……時に清都観の道士たる張惠元は奏して云う、「周の宗盟には異姓を後と為す。陛下は柱下を宗承す（李氏皇帝は老子を受け継いでいる）。今日義を堅つるに、道士をば先とせざるを得ず。又た夷夏の同じからざるは、客主の位の別なり。望むらくは道士をば先に上座とせんことを請う」と。帝は沈黙すること之を久しくす^{*13}。

この引用文冒頭に「顯慶二年」とあるが、『釈氏稽古略』はこの件を引いて「顯慶三年」とし、論議の全文は道宣の『論衡』（『集古今仏道論衡』）の載せるところなりという^{*14}。つまりこれは、顯慶 3 年（658）6 月 12 日の西明寺落成の記念行事を、同寺の僧の道宣（596～667）が記したものである。落成の翌朝、高宗が安福門に立って群衆に答え、巨大な繡像と長旛を開示するデモンストラーションをおこなったあと、仏僧と道士を東西に配して（ここでは仏教が東、道教が西）論議させた。そのときの道教側代表の一人たる張惠元は「清都観道士」とされている。ところが、同じ『集古今仏道論衡』に顯慶 3 年 11 月のこととして張惠元の名前があげられ、「東明観道士」とされている^{*15}。西明寺落成における道仏論議が 6 月で、それから 5 ヶ月後の論議で所属道観が変わっている。これによれば、東明観の落成は西明寺に少し遅れるが、顯慶 3 年冬にはすでに存在したことになる^{*16}。

この『集古今仏道論衡』によれば、高宗は西明寺と東明観を仏教と道教を代表する仏寺と道観とみており、「仏道二教は同に一善に帰す」という思想にもとづき、西と東の教えが相互討論することで国家の安寧に寄与すると考えてい

る。高宗が当初、両者を延康坊に建設しようとしたのも、こうした思想にもとづく設計だったのである。

以上、東明観の設立に関わる事情を考察してみた。つづいて、唐の長安道教の一端たる東明観とそこに関わる道士の状況を、当時活躍した道士の墓誌によって具体的に考察してみたい。その墓誌とは、10 数年まえに新出の「東明観孫思墓誌」である。この墓誌の墓主である孫文儒は、従来から重要人物であることが史料から窺えた。そのため、新出墓誌と従来の史料とを総合して検討することができる。

「東明観孫思墓誌」について

まず発表された「東明観孫思墓誌」を掲出する（拓本写真にもとづく。下線は筆者）^{*17}。

大唐故東明観孫法師墓誌銘并序

法師諱思，字文儒，樂安人也。徒居鄆焉。緒自周王，裔夫吳主，瑯琊內史牧，器重於當代；光祿大夫謙，道藹於終古。嵇康幽憤，終取魄於公和。殷浩忘滄，竟知名於安國。家聲祖德，紹武重規。曾祖父積，並枕仁籍義，果行育德，不事王侯，高蹈林藪。青瑗千仞，玩潭石之凌臨；濁酒一杯，賞煙花之汎濫。汎騰志事，當取性於琴書；夏統平生，不辱身於郡府。法師深器局偉，容儀倜儻不凡，滑稽多智，論符秋水，思若春泉。姬公孔父之書，衆妙真如之說，嘗耳目所接，固終身不忘矣。尤善老莊，兼綜文史，童蒙求我，導達忘疲。昔在眇年，爰慕仙範，服勤至要，少選無忽。年甫十六，以乾封二年奉勅入道，住東明観焉。以爲鳳璽龍章，琅書玉字，證乎道極，實以身寶。以長壽年中於蜀郡青城山，受三洞具法。法師懋德光時，徽風邁俗，高潔之譽，昭聞于天，祚膺帝俞，奉若明命。萬歲通天元年四月奉勅觀明堂對御開講，又以景龍二年四月奉勅於甘露殿激揚法教。法師清詞駿發，雄辯霜飛，塞林上士，自然聳聽；隸苑名僧，於茲杜口。景龍三年二月奉動於太白山及昆明池等投金龍玉壁，景雲元年八月奉動於嵩岳及北邙山老君廟等建金錄寶齋。所以精祈介福，大庇群有，遂得彩雲叢見，用表休徵，白鶴群翔，式旌嘉祝，方異迴浮，真氣恒吐，陰於丹庭，遠扇靈風。每揚芬於絳府，豈意仙官拜職，將辭六合之間；寶界宣遊，俄翥九天之上。以先天二年十月九日子時遷化，春秋六十有三。即以其月二十二日瘞杖烏於長安馬祖原，禮也。法友揮涕，感雲輅之不駐；門人銜悲，歎風馭之云邈。慮居詣易謝，冥漠難求，勒桂巖之幽石，紀松子芳猷。其銘曰：英英上士，邈邈仙材。縱辯丹掖，飛聲紫台。天書忽召，羽駕相催。空憶華表，千年復來。

宗盟異姓爲後，陛下宗承柱下。今日豎義。道士不得不先。又夷夏不同客主位別。望請道士於先上座」。帝沈默久之。『大正藏』第52卷、2104、388頁。

注14…『釈氏稽古略』卷3「戊午顯慶三年六月十二日，帝創西明寺成。十三日帝出繡像長幡送寺次奉。尋召僧道各七人入百福殿，共談名理以相啓沃，復各賜坐論議。全文備載南山宣律師論衡。『大正藏』第49卷、2037、817頁。

注15…『集古今仏道論衡』卷丁「顯慶三年冬十一月，上以冬雪未霽憂勞在慮，思弘法雨祈雪降。爰構福場故能靜處中禁廣嚴法座。下敕召大慈恩寺沙門義褒，東明観道士張惠元等入内，於別中殿講道，論始于斯時也。』『大正藏』第52卷、2104、388頁。

注16…異説として、乾封元年（666）の高宗の封禪のあと、太宗及び文德皇后のために東明観を京師に作ったという説が杜光庭『歴代崇道記』にみえるが、後述する。

注17…賈梅「唐東明観「孫思墓誌」考釈」『碑林集刊』第10輯、陝西人民美術出版社、2004年、50～56頁。

太歳癸丑十月辛卯朔二十二日壬子建

これをクロニカルに整理すると次のようになる。

651 年、生まれ。孫文儁は玄宗の先天 2 年（713）10 月 9 日に「春秋六十有三」で亡くなっているから、永徽 2 年（651）の生まれである。

667 年、入道。乾封 2 年（667）に 17 歳で勅を奉じて入道し、東明観に住した。

692～693 年頃、上清位を得る。長寿年間は 692・693 年であり、この間に四川の青城山で「三洞具法」つまり上清位までの法籙をすべて受けおわった。

696 年、御進講。万歳通天元年（696）4 月に勅を奉じて洛陽の明堂で則天武后に講義をした。

708 年、仏道論争。景龍 2 年（708）4 月に勅を奉じて、長安城宮城の内廷の奥の殿堂である甘露殿において、仏道の優劣を仏僧と議論し、相手を黙らせた。

709 年、投龍簡。景龍 3 年（709）2 月に勅を奉じて太白山と昆明池などで金龍玉璧を投げる投龍簡の儀礼をおこなった。

710 年、金籙齋。景雲元年（710）8 月に、勅を奉じて嵩山と北邙山老君廟などで金籙齋を挙行政した。

713 年、遷化。10 月 9 日に亡くなり、10 月 22 日に墓誌銘が作られ、長安馬祖原に埋葬された。

以下、問題となる項目ごとに論じる。

667 年の入道

乾封 2 年（667）、孫文儁が勅命によって入道したのは、この前年の乾封元年（666）におこなわれた高宗の封禪を祝福するためではなかろうか。『旧唐書』巻 5「高宗本紀」によると、高宗は泰山の封禪を終えたあと、2 月に亳州にまわって、みずから老君廟に幸し、太上玄元皇帝を追号した。杜光庭の『歴代崇道記』によると、そのとき、太宗皇帝と文徳皇后のために長安に東明観を造ったという¹⁸。前述の東明観の設立事情を考慮すると、この記事はおそらく、すでに建てられていた東明観に何らか増築したことを述べているのだろう。賈善翔の『猶龍伝』によれば、このときの東明観は「土木の妙を極め、金碧の飾を尽くし、宏壯輪奐たること未だこれ有らざるなり」とのことである¹⁹。つまり、封禪を祝って東明観の増築があり、記念行事の際に童子の入道儀礼が挙行政され、孫文儁はその一人として入道したのではなかろうか。

封禪は本来、国家祭祀であって道教の儀礼ではない。しかし高宗は、泰山封禪のあと老君に太上玄元皇帝を追号している。つまり、封禪の実施にあたって

注 18…『歴代崇道記』『道蔵』第 11 冊 2 頁。

注 19…『猶龍伝』「極土木之妙，盡金碧之飾，宏壯輪奐，未之有也」。『道蔵』第 18 冊 30 頁。

道教界の協力を得ていたのである。その一例として劉道合をあげることができる。『旧唐書』巻 192 によれば、陳州宛丘の人である劉道合は、初め潘師正とともに嵩山中岳に隠棲していたが、高宗が彼の令名を聞いて太一觀を造ってやった。そののち彼は洛陽の内道場に入り、高宗が泰山の封禪をおこなうまえに、洛陽宮城内の儀鸞殿で止雨の術をおこなって成功した。そして、封禪の実施に先んじて、泰山に行って予祝したという^{*20}。孫文儒は、このような情勢の下で、勅命によって皇太子にちなんだ東明觀に入道したわけである。

692 ～ 693 年頃に上清位を得る

孫文儒が三洞位を得た四川の青城山は第 5 大洞天である。これは、長安の皇族と結びついた権威的な道觀と青城山の関連を示す比較的早い例である。こののち、開元 12 年（724）から 18 年（730）ころに、青城山で道教徒と仏教徒とのあいだの騒乱がおこったが、玄宗が直接指示して官僚と道士らを派遣して調停させた。そのメンバーの 1 人に「東明觀主の王仙卿」という道士がいる。「青城山常道觀勅並表」によると、「金紫光祿大夫…（職名）…韋縉、中大夫…（職名）…張奉及らは、並びにみづから聖旨を奉じて、檢校内供奉精勤道士の東明觀主王仙卿をして、この青城丈山靈山に就きて修齋設醮して並びに龍璧を奉ぜしむ」という^{*21}。この記事は開元 18 年（730）6 月のことである。王仙卿は玄宗との関係が密接で、開元 14 年（726）に玄宗が北邙山の玄元皇帝廟を修築したときにも玄宗に招かれて参加している^{*22}。このときは「峨嵋山の王仙卿」と称せられている。彼はもともと四川の第七小洞天たる峨嵋山の道士だったので、青城山にも関係があったのであろう。孫文儒の墓誌によれば、それより約 30 年前から、東明觀の道士は青城山で修行をおこない、そこで最高の位階を授かるルートを持っていたことがわかる。あるいは、東明觀の李榮が峨嵋山に縁のある道士だったことと関連があったとも考えられる^{*23}。

696 年の御進講

墓誌では御進講を生涯の功績としているが、それは洛陽の明堂でおこなわれた特別な御進講だった。明堂とは、天子が天と結びついて政治をおこなう場である。高宗のときには建立に至らず、則天武后が垂拱四年（688）に万象神宮という明堂の建築物を建てた。その高さは約 90 メートルもあったという。この建築物は本来、儒教が帝王に要請する大享の祭祀や大赦・改元・政令の発布などをおこなう場である^{*24}。しかし則天武后は、載初元年（690）2 月に『孝経』の講義とともに、侍臣および仏僧・道士らに順次論議させている^{*25}。つまり、孫文儒が御進講する 6 年前から、明堂で儒者と道士と仏僧による議論がおこなわれていたのである。則天武后は、同年 9 月に国号を周に改め、皇帝に即位した。この万象神宮は、証聖元年（695）正月に焼失したが、すぐに再建され、

注 20…道士劉道合者、陳州宛丘人。初與潘師正同隱於嵩山。高宗聞其名、令於隱所置太一觀以居之。召入宮中、深尊禮之。及將封太山、屬久雨、帝令道合於儀鸞殿作止雨之術、俄而霽朗、帝大悅。又令道合馳傳先上太山、以祈福祐。中華書局、51 27 頁。

注 21…「青城山常道觀勅并表」、「金紫光祿大夫…（職名）…韋縉、中大夫…（職名）…張奉及等、并親奉聖旨、令檢校内供奉精勤道士東明觀主王仙卿、就此青城丈山靈山修齋設醮并奉龍璧」。陳垣『道家金石略』陳智超、曾慶瑛校補、文物出版社、1988 年、111 頁。

注 22…蔡瑋「張探玄碑」陳垣『道家金石略』136 頁。

注 23…王維「大薦福寺大德道光禪師塔銘」に「禪師諱道光、本姓李、綿州巴西人。其先有特有流……大父懷節、隱峨嵋山、行無轍迹。其季父榮為道士、有文知名」とあり、李榮の父親は峨嵋山に隠棲した。『全唐文』巻 327、上海古籍出版、1990 年、1464 頁。

注 24…則天武后の明堂については、Antonino Forte, *Mingtang and Buddhist Utopias in the History of the Astronomical Clock. The Tower, Statue and Armillary Sphere Constructed by Empress Wu*, Rome/Paris, Istituto Italiano per il Medio ed

Estremo Oriente/EFEO
(Serie Orientale Roma, 59
; PEFO, 145), 1988. 明堂
の中国思想史における変遷
は、南澤良彦『中国明堂思
想研究』(岩波書店、2018
年2月)に詳しい。

注25…『旧唐書』巻22「礼
儀志」「其年二月、則天又
御明堂、大開三教。内史邢
文偉講孝經、命侍臣及僧道
士等以次論議、日昃乃罷」。
864頁。

注26…「岱嶽觀碑」「大周
萬歲通天貳年、歲次丁酉、
東明觀三洞道士孫文儁、奉
天冊金輪聖神皇帝肆月伍日
勅、將侍者姚欽元詣此嶽觀
祈請行道。事畢、敬造石天
尊像壹軀、並式真夾侍、庶
茲景福、永奉聖躬、聊記其
年、因傳不朽……」『道家
金石略』81頁。

注27…『全唐文補遺』吳
鋼主編、陝西省古籍整理
辦公室編、三秦出版社、
1994年、434頁。「尊師
俗姓侯氏、諱敬忠、鄭州
管城人也。---師志行□厚、
常習道藝。龍朔二載、睿宗
帝降誕日、□出家焉、便居
鄭崇靈觀。---屬和帝永隆
二歲、捨其代邸、列以元儲、
遂置弘道觀。-----通天年、
契丹叛逆、有敕祈五岳、恩
請神兵冥助。尊師銜命衡霍、
遂致昭感。」

天冊萬歲2年(696)に竣工すると、4月から年号を萬歲通天とした。孫文儁が御進講をおこなったのはこの年である。したがって孫文儁は、新たに建った明堂の竣工を記念する活動の一環で道教經典を講ずる役割を担ったのである。この明堂は通天宮と号されたが、「通天」とは「洞天」と同意であり、則天武后が嵩山などの洞天における投龍簡の儀礼を好んだことと一脈通じるものがある。

御進講の翌年となる萬歲通天2年(697)に、孫文儁は則天の勅命を奉じて泰山にて道教儀礼を執行し、天尊像と二真人像を造っている^{*26}。これはおそらく投龍簡をともし金籙齋をおこなったのであろう。この祭礼は契丹の反乱と関係する可能性が考えられる。「大唐大弘道觀主故三洞法師侯尊誌文」^{*27}に次のようにあるのが参考になる。

尊師の俗姓は侯氏、諱は敬忠、鄭州管城の人なり。---師は志行□厚にして、常に道藝を習う。龍朔二載、睿宗帝の降誕日に、□出家し、便ち鄭の崇靈觀に居る。---和帝の永隆二歲に属り、其の代邸を捨して、列するに元儲を以てし、遂に弘道觀を置く。-----通天の年、契丹は叛逆すれば、敕有りて五岳に祈り、神兵の冥助を恩請せんとす。尊師は命を衡霍に銜み、遂に昭感を致す。

これによれば、侯敬忠という道士は、龍朔2年(662)に睿宗の生誕を祝って出家入道した。その後、和帝の永隆2年(681、10月に改元)に洛陽に弘道觀が設置され、そこに務めた。萬歲通天の年(696)、契丹の反乱で、神兵の冥助を祈願すべく、五岳に祈る勅によって衡山と霍山に赴き、金籙齋を挙行し、それで神護を得たという。これは、696年5月、営州で李尽忠と孫万栄が反乱をおこし、8月に唐軍を大破したが、10月に李尽忠が病死したこと(『資治通鑑』巻205)をいっていると思われる。契丹の反乱を抑えるために名山での道教祭祀による祈祷がおこなわれたことがわかる。

さて、契丹の反乱はその後も続いた。697年3月、孫万栄は再び唐軍と東硤石谷で交戦して壊滅させた。5月に入って唐軍は態勢を立て直して反撃に出る。孫文儁の泰山における祭礼は、この時期におこなわれている。その後、6月下旬に唐軍が孫万栄の城を落とすと、契丹軍は敗走し、孫万栄は「唐に帰せんと欲すれば、罪已に大なり。突厥に帰すれば亦た死す、新羅に帰するも亦た死す。將た安くに之かんや」と嘆いているところを部下の手で斬首された(『資治通鑑』巻206)。つまり、孫文儁の祈祷が実を結んだかたちになった。

708年の仏道論争

708年にはすでに則天武后は退けられ、睿宗の時代になっている。睿宗は、

則天武后の信任を得ていた孫文儒への重視を継承したことがわかる。

東明観は、早い時期から仏道論争の根拠地となっていた。東明観には、道士の馮黃庭と李栄の碑があったというが^{*28}、李栄は高宗時期に仏教攻撃を展開した道士であった。その一例として『冊府元龜』巻599の記事が挙げられる。

上官儀は弘文館学士と為る。顯慶五年（660）六月、高宗は齊聖殿に御し、儀（上官儀）及び呂才・直学士李玄植・道士張惠元・李栄・黄玄歸及び名僧らを引いて御前に於て講論せしむ。李玄植に命じて講座に登って『易』の題を發し、呂才・李栄らは次を以て問難し、經義を敷揚し、時を移して乃ち罷む^{*29}。

ここでは、儒家が『易』を講義して、それに対して道士と仏僧が議論している。あたかも、則天武后が載初元年（690）2月に明堂において『孝經』の講義とともに、侍臣および仏僧・道士らに順次論議させた行為（前掲）はこれと似ている。則天武后はこの行為を明堂においておこなうことで、高宗のやり方を継承しつつ、このような論議がもつ国家安寧の象徴的意味を強化しようとしたのではなかろうか。東明観にはこのような役割があったからこそ、孫文儒の墓誌に「姫公孔父之書、衆妙真如之說、嘗耳目所接、固終身不忘矣（周公孔子の儒家の書、老子・釈迦の教え、耳目にふれたものは、一生忘れない記憶力の持ち主）」と、道士の彼が儒教・仏教の説にも通曉していたことを強調している。ところで、高宗の道仏帰一の思いとは裏腹に、李栄という道士の態度は感情的で、仏教を心底憎んでいたようであった。總章中（668～670）に長安の名刹たる興善寺が火事で焼けたとき、李栄は仏教界の不幸を喜んで^{*30}。

東明観の道士が仏教を攻撃するのは、東明観の設立事情も関わっているように思われる。東明観はもともと西明寺とともに一つの坊に造るという勅命だったことは前述した。延康坊を占有して西明寺を建て、勅では同じ坊に建てるはずだった道観を、玄奘が用地不足を口実にどかせた。これは、その後に東明観の道士が口汚く仏教側を攻撃する伏線となったのだろう。

『道教靈驗記』「木文天尊見像驗」には、開元7年（719）のこととして、次のような故事を載せる^{*31}。四川の寺の柱から切り出された天尊が長安の玄宗の内殿に進められた後、東明観に安置され公開された。仏僧たちは、天尊は寺の柱から切り出されたのだから維摩詰像だと主張して、道観にあることを非難した。玄宗は、天尊の冠が維摩詰ではなく太一天尊のものだと鑑定して、引き続き東明観に置かせた。そのため西明寺の僧徒が力士を雇って夜間にそれを盗みださせた。ところが、天尊をかついで遠くまで歩いたはずなのに、気がつくと東明観の前に戻っていた。そのため、全員逮捕されたが、玄宗は罪を不問に付したという。

注28…『兩京城坊考』同前。『金石錄』にはまた別に「唐東明觀道士茹法師碑、長安四年（704）立京兆」とあるが、茹法師の事跡は不明。

注29…『冊府元龜』巻599「上官儀爲弘文館學士、顯慶五年六月、高宗御齊聖殿、引儀及呂才、直學士李玄植、道士張惠元、李栄、黄玄歸及名僧等於御前講論、命李玄植登講座發《易》題、呂才、李栄等、以次問難、敷揚經義、移時乃罷」。鳳凰出版社、2006年、6912頁。

注30…『大唐新語』巻13「京城流俗、僧、道常爭二教優劣、遞相非斥。總章中興善寺爲火災所焚、尊像蕩盡。東明觀道士李栄因詠之曰：「道善何曾善、云興遂不興。如來燒亦盡、唯有一羣僧。」時人雖賞榮詩、然聲稱從此而滅」。中華書局、1984年、190頁。

注31…『道教靈驗記』「木文天尊驗」「木文天尊者、開元十七年、蜀州新津縣新興居寺、四月八日設大齋。聚食之次、有一道流後至、就眾中坐、眾人輕侮之、不與設食。齋畢、道流起入佛殿中、良久不出。人皆異之、爭入殿尋求、無復蹤跡。忽見道流隱形在殿柱中、隱隱分明。以刀斧割之、益加精好。其像於殿柱中自然而見：高三尺五寸以來、雲冠霞衣、執手爐寶香、右手炷香於煙上。冠中有鳥、如鴛鴦形。足下方頭履、履下蓮花、花後荷葉、上有神龜之形。左肘後有雲片連焰、光中有青

龍之首。右肩之前有虎形，迴顧於左。此外周身火焰，如太一天尊，眉髯鬚髮，細於圖畫。自外繞身，有雲葉天花，一十二處。頭光之上，有大花如蓋，以蔽其身。長史張敬忠具以上聞，敕內官林昭隱就川迎取像柱，令作寶輿，好好豎安。至京，進於內殿，上躬親禮謁。三日大齋訖，令衛尉寺於東明觀陳設，宣送天尊就觀安置。大開道場，許臣庶瞻禮。仍今兩街大觀，每處作道場七日。是時，僧等上表抗論云：寺中示見，必是維摩詰之像，非關道門所有。上令宣示曰：朕觀像柱之上，是天尊之冠，非維摩詰中也。僧等既慙於妄奏，乃雇有力之士，使於東明觀道場中竊之。既供養數日，人心怠倦，力士夜於道場中抱取像柱，以絹繩繫縛，負之而行。出觀院之外，歷街坊極遠，約十餘坊，力疲而坐歇。須臾既曉，只在道場之前，忽遂擒之。訊其所以，乃西明寺僧召募三十人，令其竊取像柱。具事密奏，明皇不令尋究，收像柱於大內。其後模寫絹本，宣賜諸道及宰臣焉。羅爭鳴輶校『杜光庭記傳十種輯校』中華書局、2013年、191頁。『道藏』第10冊814頁，『雲笈七籤』卷118、2593頁にも載せる。

注32…姜捷「關於定陵陵制的幾個新因素」『考古與文物』2003年第1期、69～74・83頁。

注33…拙稿「開元期の長安道教の諸問題」日文研叢書第42集、共同研究報告書『古代東アジア交流の総

この故事は、東明観が玄宗時期にも皇族と直接結びついており、西明寺を代表とする仏教側との仏道論争における道教側の代表の役割を担っていたことの反映であろう。

710年8月の金籙齋

孫文儒による、景雲元年の嵩山と北邙山での祭事は、中宗の崩御（710年6月）および韋后に対する李隆基（玄宗）らのクーデターに関連したものではなかろうか。当時の事情や道教活動をふまえてみると、そのように思われる。玄宗の「誅韋氏制」に挙げられた、韋后に対する李隆基のクーデターに協力した人物のなかに「東明観道士馮処澄」がいる。この人物の事跡は不明だが、東明観の由来となる太子李弘は玄宗の義理の父であり、その道観の道士が玄宗のクーデターに参加していたことになる。彼の役割は、おそらく実際の暴力行為ではなく、敵の呪伏ないし勝利祈願といった法術による貢献にあったのだろう。これにより、東明観が権力闘争において玄宗側についていたことがわかる。

孫文儒の景雲元年（710）8月の金籙齋のあと、11月に中宗の埋葬が挙行された。そのとき『五鍊經』（『道藏』の『太上洞玄靈寶滅度五鍊生尸妙經』）の「中央天文」が埋葬儀礼に使われた。それを雲篆で刻んだ石が中宗の墓所である定陵から出土している^{*32}。この雲篆の文字内容は容易に読解できないが、私見によれば、太清観の道士だった張萬福の『靈寶五鍊生尸齋儀』にみえる翻訳文と一致している^{*33}。このことから、毒殺された中宗の身体の「鍊度」（身体の練り直しの儀礼）は、張萬福をはじめとする、当時設置されたばかりの太清観の道士によっておこなわれたと思われるのである。

ところで、道教經典の一切経音義に附録した『一切道経音義妙門由起』の序文である玄宗「一切道経音義序」で、玄宗は「諸観の大徳」を列挙しているが^{*34}、その一人として孫文儒の名を挙げている。そこでは東明観ではなく「太清観法師」となっている。『一切道経音義』の編纂は、先天元年（712）8月から12月の間と考えられるから^{*35}、彼はそれ以前に東明観から太清観に異動したことがわかる。いつ東明観から太清観に異動したのか。『長安志』巻10にはつぎのようにある。

次の南は金城坊。……東南隅は開善尼寺。……寺の北は廢太清観。本もと悖逆庶人の宅。初め安樂公主を封ずるも、出でて武三思の子の崇訓に降ぐ。誅せられし後、休祥坊より宅を此に移す。改めて武承嗣の子の建秀に適ぐも、誅せらるに及びし後、勅ありて太清観道士の史崇玄はここに居す。崇玄は先天二年を以て謀逆して法に伏す。其の観は遂に廢せらる^{*36}。

これによれば、安樂公主が休祥坊（金城坊の北面）から金城坊の東南隅にあつ

た開善寺の北（頒政坊の西対面）に移った。しかし安樂公主は、710年6月、韋后らと謀って中宗を毒殺した（とされる）。それで、太平公主と李隆基（玄宗）らが安樂公主らを誅殺した。右の『長安志』巻10の説明によると、「悖逆庶人」（安樂公主）が710年に李隆基（玄宗）に誅殺されたあと、史崇玄が彼女の邸宅に入った。この邸宅は壯麗を極めていたという^{*37}。この邸宅が太清觀とされた。したがって、金城坊の太清觀は、710年6月以降に設けられたのである。

となると、孫文僞が東明觀から太清觀に異動したのは、安樂公主の邸宅が太清觀とされた710年6月以降、『一切道經音義』が編纂された先天元年（712）8～12月より以前となる。つまり孫文僞が710年8月に嵩山と北邙山で祭事をおこなったときは、太清觀の道士となっていた可能性がある。中宗の埋葬を担当したのが太清觀の張萬福だとすれば、孫文僞も太清觀設立時に東明觀から異動し、その後、張萬福らと国家事業としての『一切道經』の編纂・校訂の仕事に預かったと考えるのが穏当だろう。これだけ地位の高い道士であるから、東明觀では觀主だったと考えられるが、史崇玄の「妙門由起序」には、東明觀主として寇義待という道士の名もみえる。孫文僞の後継者だろうが、寇義待については、『混元聖記』巻8に「朝散大夫孫瑞奏狀」を引いて、次のような話がある。儀鳳3年（678）4月4日に高宗の勅命で道士の鄭元隱が洛陽の北邙山の「清廟」（玄元皇帝廟）で祭事をおこなった。すると、5月1日に廟所の東門に老君が現われ、そこにいた道士の寇義待としばらく話をしたという^{*38}。寇義待が東明觀主として『一切道經音義』に参加したのは先天元年（712）だから、彼は30数年前の若き日に老君の奇跡にあずかったとされる名道士だったことがわかる。

713年の遷化

先天2年（713）7月3日に史崇玄が謀反のかどで逮捕され、太清觀は廃止された。孫文僞はその直後、東明觀に復歸し、同年10月9日に亡くなった。史崇玄に協力していたのに、立派な墓誌銘が刻され、赫赫たる経歴が伝えられたということは、史崇玄に連座せずに済んだことを意味する。つまり、太清觀の道士で史崇玄に協力していた道士でも、必ずしも連座で処罰されたわけではなかったことがわかる。

結語

最後に、東明觀の道教文化史的な重要性について述べて結語としたい。東明觀の文化的役割も、対をなす西明寺から類推できる側面があるのではなかろうか。

西明寺では、顕慶3年6月に落成したあと、高宗は勅を下して、盛大な儀

合的研究』2008年、365～395頁。

注34…『一切道經音義序』『道藏』第24冊720頁。

注35…雷聞「唐長安太清觀與《一切道經音義》的編纂」『唐研究』第15巻、2009年、199～226頁。

注36…『長安志』巻10「次南金城坊。……東南隅、開善尼寺。……寺北廢太清觀。本悖逆庶人宅。初封安樂公主、出降武三思子崇訓、誅後、自休祥坊移宅於此、改適武承嗣之子延秀。及誅後、敕太清觀道士史崇玄居焉。崇玄以先天二年謀逆伏法、其觀遂廢」。336頁。

注37…『旧唐書』巻183「外戚伝」「廢秀祥坊宅、窮極壯麗、帑藏爲之空竭」。4734頁。

注38…『混元聖記』巻8『道藏』第17冊857頁。

注 39…『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻 10『大正蔵』第 50 巻 275 頁。

注 40…『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』巻 10「勅先委所司簡大德五十人侍者各一人。後更令詮試業行童子一百五十人擬度。至其月十三日、於寺建齋度僧。命法師看度。至秋七月十四日、遣僧入寺」。同前。

注 41…道宣『大唐内典録』巻 10『大正蔵』第 55 巻 337 頁。

注 42…藤善真澄「晩年の道宣」『道宣伝の研究』京都大学学術出版会、2003 年。

注 43…李栄の著書と「虚」の思想については、砂山稔『隋唐道教思想史研究』（1990 年、平河出版）第 7 章、327～331 頁を参照のこと。

注 44…『集古今仏道論衡』巻丁。

注 45…「一切道経序」「孝敬皇帝……今者黄離遽殞，碧題玄虚。翔鶴可羈，奄促游仙之駕；雞鳴載響，無復入謁之期。……故展哀情，為寫《一切道経》卅六部」。『中華道蔵』第 5 冊 601 頁。

注 46…「賀寫道德五本表」『全唐文』巻 962。

礼をもって玄奘を慈恩寺から西明寺に迎えさせた^{*39}。7 月に訳経僧のグループ 50 人が入寺^{*40}、道宣（596～667）ら学僧も寺に入った。その年に大蔵経 799 部 3361 巻を収蔵^{*41}、この一切経の管理において、道宣は『大唐内典録』を編纂するとともに、一切経からの抜書きである『諸経要集』20 巻を編んだ。同じく西明寺の道世の『法苑珠林』100 巻も、ここに収蔵された一切経を読んで撰述編纂された^{*42}。このような例からわかるように、西明寺は、仏典翻訳の場および仏教教学の研究機関・図書館として、長安において中心的な役割を当初から担っていたのである。だとすると、道教界における似た役割を東明観が持っていたのではなかろうか。

仏教との論争では、東明観の道士が担当する場合が多かったことは前述のとおりである。とくに李栄は、顕慶 2 年（657）から 5 回にわたって仏道論争に参加している。彼の著作として、『道德真経注』『莊子注』『西昇経注』『洗浴経』などがあつた^{*43}。道宣は彼のことを「老宗の魁首」と称している^{*44}。

西明寺との対照で考えると、東明観は道教の一切経を所蔵していたのではなかろうか。敦煌本 S.1513「一切道経序」によれば、太子李弘が上元 2 年（675）に病没したのを哀悼して、高宗の勅命で『一切道経』が編纂されたようである^{*45}。この『一切道経』がどこに所蔵されたか明言されていないが、当初から太子のために建てられた東明観がそれにふさわしい。のちのことになるが、『一切道経音義妙門由起』の玄宗の序文に、太清観・東明観・玄都観・宗聖観という長安の道観名が挙げられている（他所では洛陽の福唐観と絳州の玉京観）。これらは一切道経の収蔵と関連していると考えてよいと思われる。この一切道経と高宗勅命の一切道経は同一のものではないが、要するに、東明観は一切道経を所蔵するだけの資格を備えていたとはいえる。天宝 10 載の「賀寫道德五本表」によれば^{*46}、玄宗が命じた『道德経』の写本 5 本は「太清宮・興唐・東明・龍興観に各おの一本を置く」とされている。この例からも、道教経典を特に収蔵する場として東明観が候補になっていたことがわかる。

以上の考察から、長安の東明観は、高宗の勅命で建立され、皇族の血縁の追福や病氣治癒の祈祷を担った、豪華絢爛で巨大な権威的道観だった。ほぼ同時に建設された西明寺とペアであり、建築設計が西明寺に倣っただけでなく、西明寺を代表とする仏教界との論争における道教界の代表的な道観であり、一切経の収蔵などにおいても重要な道観だったことがわかった。その東明観の道士である孫文儒の事跡を分析することで、則天武后から睿宗・玄宗の時期に東明観が皇帝と直結して、国家鎮護のための道教活動をおこなっていたことが具体的に理解できる。